山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第32号（2011.9）

介護等体験実習が学生の意識に及ぼす影響

―社会福祉施設における実習について―

佐伯　英人

The Influence of the " Experience of Caregiving Practice " at Social Welfare Institutions on University Student's Consciousness

SAIKI Hideto

（Received August 8, 2011）

キーワード：介護等体験実習、社会福祉施設、学生の意識

はじめに

1997年６月18日に「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律」（介護等体験特例法）が公布され、1998年４月１日から施行された。この法律の第１条で「この法律は、義務教育に従事する教員が個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深めることの重要性にかんがみ、教員としての資質の向上を図り、義務教育の一層の充実を期する観点から、小学校又は中学校の教諭の普通免許状の授与を受けようとする者に、障害者、高齢者等に対する介護、介助、これらの者との交流等の体験を行わせる措置を講ずるため、小学校及び中学校の教諭の普通免許状の授与について教育職員免許法の特例等を定めるものとする」と趣旨が示され、小・中学校の普通免許を取得するに当たり、原則、介護等体験実習が必修事項となった。1997年11月26日の文部省令「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律施行規則」の第１条では介護等の体験の期間が「七日間とする」と示された。さらに、1997年11月26日の文部事務次官通達「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律等の施行について」において「七日間の内訳については、社会福祉施設等五日間、特殊教育諸学校二日間とすることが望ましいこと」と示された。

山口大学教育学部のカリキュラムでは、教育実習として２年次に参加実習と参観実習、３年次に基本実習（前期実習・後期実習）、４年次に応用実習（別名：委託実習）を行っている。この中で介護等体験実習の一部として位置付けられている実習が２年次の参加実習である。この参加実習は附属特別支援学校の行事などに２日間、参加し、手伝いをするというものである。この他、社会福祉施設での介護等体験実習を５日間、行っている（山口大学教育学部教育実習部，2008）。この社会福祉施設での介護等体験実習については、学生が２～４年の間のいずれかの時期に参加すればよいことになっているが、事実上、２年次に参加する学生が多い。実習先となる社会福祉施設には受け入れ可能な学生の人数や時期といった制限があるため、参加する学生の希望をとり、それを基に山口県社会福祉協議会が調整し、実習先を決定している。

１．問題の所在と研究の目的

社会福祉施設での介護等体験実習に参加した学生の意識について調査した先行研究として、浦島・白石・藤井（1999）、藤野（1999）、佐藤・藤田・和田（2000）、佐藤・和田・藤田（2001，2002）、新崎（2005）、田中・片岡（2006）、梅澤（2008）、田実（2008）、伊藤（2010）などがある。

山口大学教育学部では、前述した介護等体験特例法の施行に伴い、1998年度の入学生を対象に1999年度から社会福祉施設での介護等体験実習を実施している。2000年度の入学生からは介護等体験実習を終了するこ

とにより、１単位が認定されるようになった。しかし、これまで、社会福祉施設での介護等体験実習が本学部の学生の意識にどのような影響を及ぼしているのかについて研究されてこなかった。そこで、本研究では、本学部の学生を対象として、社会福祉施設での介護等体験実習が学生の意識にどのような影響を及ぼしているのかについて知見を得ることを目的とした。

２．研究の対象と調査の方法

本研究の対象は2008年度に行われた社会福祉施設での介護等体験実習である。この実習に参加した教育学部の学生は166名であった。参加した学生には、性（男性，女性）の違い、所属（養成課程，非養成課程）の違い、施設（児童福祉施設，障害者支援施設，老人保健福祉施設）の違い、実習先が希望した施設であったのか、そうでなかったのかといった違いがある（表１）。実習先が希望した施設であったのか、そうでなかったのかといった違いが生じるのは、前述したように受け入れ施設を調整し、決定しているからである。このことは、必ずしも学生の希望通りの施設にならない場合があることを示している。本研究ではこれらの違いを分析の視点とした。

調査対象者166名に対して、実習を終了した時点で質問紙による調査を実施した。質問項目は、佐藤・藤田・和田（2000）、佐藤・和田・藤田（2001，2002）を参考にして、介護等体験実習が学生の意識にどのような影響を及ぼすのかを測定する目的で作成した（表２：因子分析を行った結果，抽出された項目）。質問紙では「次の項目について、介護等体験実習をして、感じていることや思っていることを答えてください。それぞれの質問において、あてはまる番号に一つずつ○をつけてください。」という教示を行い、５件法で回答を求めた。５件法は、まったくあてはまらない（１点）、あまりあてはまらない（２点）、どちらともいえない（３点）、だいたいあてはまる（４点）、とてもあてはまる（５点）とした。質問紙には調査対象者の性、所属、実習先の名前を記入する欄を設定し、また、実習先が希望した施設であったのか、そうでなかったのかについて記入する欄を設定し、回答を求めた。

調査対象者166名中、回答者は134名（回収率：80.7％）であった。回答者の属性と人数を表１に示す。この他、学生には学年の違いがあったが、第２学年が129名、第３学年が４名、第４学年が１名であり、第３学年と第４学年の人数が極端に少なかったため、本研究では分析の視点としなかった。

表１　回答者の属性と人数

属性	グループ	人数
性	男性	51
	女性	83
所属	養成課程	83
	非養成課程	51
施設	児童福祉施設	53
	障害者支援施設	9
	老人保健福祉施設	72
施設の希望	実習先が希望した施設であった	111
	実習先が希望した施設ではなかった	23

３．因子分析の方法と結果

因子分析の因子抽出法には主因子法を用い、固有値の落ち込みがみられるところまでを抽出の基準とした。その結果、基準を満たす因子が３つ得られたので、３因子構造と判断した。そこで、因子の回転（Promax回転）を行い、因子負荷量の低い項目（絶対値0.40未満）を削除し、再度、因子分析を行った。この手順を因子負荷量の低い項目がなくなるまで繰り返した。そして、得られた第１因子を「職員の方との良好なかかわりと職員の方に対する感謝の気持ち」、第２因子を「人の気持ちを考え、人格を尊重する態度」、第３因子を「福祉の仕事に対する興味・関心と福祉の仕事に対する良好な意識」と命名した（表２・３）。

さらに各尺度の内的整合性を検討するためにCronbachのα係数を算出した。その結果、「職員の方との良好なかかわりと職員の方に対する感謝の気持ち」はα＝0.79、「人の気持ちを考え、人格を尊重する態度」はα＝0.75、「福祉の仕事に対する興味・関心と福祉の仕事に対する良好な意識」はα＝0.74であり、それ

ぞれ信頼性があることが確かめられた。なお、因子分析・信頼性分析にはSPSS 16.0を使用した。

表２　因子分析の結果

項　　目	因子負荷量		
	第１因子	第２因子	第３因子
職員の方から、いろいろと教えてもらえた	0.90	-0.15	0.08
施設の職員の方は自分に親切にかかわってくれた	0.74	0.06	-0.02
援助（支援）の仕方を具体的に教えてもらった	0.59	-0.08	0.04
分からないことについて質問することができた	0.56	0.07	-0.15
施設の職員の方に感謝している	0.51	0.23	0.07
人の気持ちを考えるようになった	-0.05	0.80	-0.01
施設を利用している人の人格を尊重して活動した	-0.09	0.71	-0.03
施設を利用している人に対してやさしく接した	0.06	0.62	-0.11
施設を利用している人について理解しようとつとめた	0.18	0.47	0.15
施設を利用している人に対して公平に接した	0.00	0.45	0.02
人の心の痛みが分かった	0.02	0.43	0.11
福祉の仕事について知りたい	-0.25	0.05	0.86
福祉関係のボランティア活動に参加したい	0.06	-0.11	0.70
福祉はやりがいのある仕事だ	0.09	-0.01	0.61
介護等体験は教職単位に必要だ	0.12	0.13	0.42
福祉がもっと充実するとよい	0.13	-0.01	0.41
寄与率（%）	28.06	8.70	5.84

（主因子法・Promax回転）

表３　因子相関行列

因子	第１因子	第２因子	第３因子
第１因子	1.00	0.40	0.55
第２因子	0.40	1.00	0.47
第３因子	0.55	0.47	1.00

（主因子法・Promax回転）

４．尺度の得点分析の方法と結果

４－１　尺度の得点の計算方法と素集計の結果

尺度の得点の計算方法を示す。先の因子分析で抽出された３つの尺度の得点については、各項目の合計得点を項目数で割って平均値を算出した。そのため、各尺度の最低得点は１点、最高得点は５点となる。各尺度の得点の素集計の結果（基礎統計量）を表４に示す。

表４　基礎統計量

	人数	平均値 (標準偏差)
「職員の方との良好なかかわりと職員の方に対する感謝の気持ち」	133	4.15(0.66)
「人の気持ちを考え、人格を尊重する態度」	131	4.33(0.45)
「福祉の仕事に対する興味・関心と福祉の仕事に対する良好な意識」	134	4.01(0.61)

４－２　*t* 検定及び分散分析の方法と結果

４－２－１　*t* 検定及び分散分析の方法

前述した方法で算出した３つの尺度の得点を用いて、性の違い、所属の違い、施設の違い、実習先が希望した施設であったのか、そうでなかったのかの違いを基に分析した。性の違い、所属の違い、実習先が希望した施設であったのか、そうでなかったのかの違いについては、それぞれ対応のない *t* 検定を行った。また、施設の違いについては１要因分散分析を行った。なお、*t* 検定及び１要因分散分析にはSPSS 16.0を使用し

た。

４－２－２　性の違いによる意識の得点比較

性の違いによる意識の得点を比較するために尺度ごとに対応のない t 検定を行った。等分散性の検定としてLevene検定を行った結果、３つの尺度において、いずれも等分散が仮定された。対応のない t 検定を行った結果を表５に示す。分析の結果、各尺度において男性と女性の間に有意な差はみられなかった。

表５　性の違いによる意識の得点比較

	グループ	人数	自由度	平均値 (標準偏差)	t 値	p
「職員の方との良好なかかわりと職員の方に対する感謝の気持ち」	男性 女性	50 83	131	4.19(0.65) 4.13(0.67)	0.56	n.s.
「人の気持ちを考え、人格を尊重する態度」	男性 女性	50 81	129	4.25(0.48) 4.38(0.43)	1.56	n.s.
「福祉の仕事に対する興味・関心と福祉の仕事に対する良好な意識」	男性 女性	51 83	132	3.88(0.75) 4.09(0.50)	1.97	n.s.

＊ $p<0.05$　＊＊ $p<0.01$　＊＊＊ $p<0.001$

４－２－３　所属の違いによる意識の得点比較

所属の違いによる意識の得点を比較するために尺度ごとに対応のない t 検定を行った。等分散性の検定としてLevene検定を行った結果、３つの尺度において、いずれも等分散が仮定された。対応のない t 検定を行った結果を表６に示す。分析の結果、各尺度において養成課程と非養成課程の間に有意な差はみられなかった。

表６　所属の違いによる意識の得点比較

	グループ	人数	自由度	平均値 (標準偏差)	t 値	p
「職員の方との良好なかかわりと職員の方に対する感謝の気持ち」	養成課程 非養成課程	83 50	131	4.15(0.66) 4.15(0.67)	0.02	n.s.
「人の気持ちを考え、人格を尊重する態度」	養成課程 非養成課程	81 50	129	4.29(0.45) 4.40(0.45)	1.46	n.s.
「福祉の仕事に対する興味・関心と福祉の仕事に対する良好な意識」	養成課程 非養成課程	83 51	132	4.01(0.58) 4.01(0.67)	0.02	n.s.

＊ $p<0.05$　＊＊ $p<0.01$　＊＊＊ $p<0.001$

４－２－４　施設の違いによる意識の得点比較

施設の違いによる意識の得点を比較するために尺度ごとに１要因分散分析を行った。等分散性の検定としてLevene検定を行った結果、３つの尺度において、いずれも等分散が仮定された。１要因分散分析を行った結果を表７に示す。各尺度において施設の間に有意な差はみられなかった。

表７　施設の違いによる意識の得点比較

	グループ	人数	自由度	平均値 (標準偏差)	F値	p
「職員の方との良好なかかわりと職員の方に対する感謝の気持ち」	児童福祉施設 障害者支援施設 老人保健福祉施設	53 9 71	2 130	4.07(0.73) 4.02(0.69) 4.23(0.61)	1.07	n.s.
「人の気持ちを考え、人格を尊重する態度」	児童福祉施設 障害者支援施設 老人保健福祉施設	53 8 70	2 128	4.31(0.43) 4.08(0.52) 4.37(0.45)	1.59	n.s.
「福祉の仕事に対する興味・関心と福祉の仕事に対する良好な意識」	児童福祉施設 障害者支援施設 老人保健福祉施設	53 9 72	2 131	4.11(0.63) 3.73(0.55) 3.97(0.60)	1.76	n.s.

＊ $p<0.05$　＊＊ $p<0.01$　＊＊＊ $p<0.001$

４－２－５　実習先が希望した施設であったのか、そうでなかったのかの違いによる意識の得点比較

実習先が希望した施設であったのか、そうでなかったのかの違いによる意識の得点を比較するために尺度ごとに対応のない t 検定を行った。等分散性の検定としてLevene検定を行った結果、３つの尺度において、いずれも等分散が仮定された。対応のない t 検定を行った結果を表８に示す。分析の結果、「職員の方との良好なかかわりと職員の方に対する感謝の気持ち」と「人の気持ちを考え、人格を尊重する態度」の２つの尺度において実習先が希望した施設であった学生とそうでなかった学生の間に有意な差はみられなかった。しかし、「福祉の仕事に対する興味・関心と福祉の仕事に対する良好な意識」の尺度においては実習先が希望した施設であった学生とそうでなかった学生の間に有意な差がみられた（t (132) ＝3.34, p ＜0.001；実習先が希望した施設であった学生＞実習先が希望した施設ではなかった学生）。

表８　校種の違いによる意識の得点比較

	グループ	人数	自由度	平均値（標準偏差）	t 値	p
「職員の方との良好なかかわりと職員の方に対する感謝の気持ち」	実習先が希望した施設であった	110	131	4.20(0.64)	1.91	n.s.
	実習先が希望した施設ではなかった	23		3.91(0.71)		
「人の気持ちを考え、人格を尊重する態度」	実習先が希望した施設であった	108	129	4.34(0.44)	0.56	n.s.
	実習先が希望した施設ではなかった	23		4.28(0.50)		
「福祉の仕事に対する興味・関心と福祉の仕事に対する良好な意識」	実習先が希望した施設であった	111	132	4.09(0.55)	3.34	***
	実習先が希望した施設ではなかった	23		3.63(0.77)		

＊ p＜0.05　＊＊ p＜0.01　＊＊＊ p＜0.001

５．考察

「職員の方との良好なかかわりと職員の方に対する感謝の気持ち」の平均値は4.15、「人の気持ちを考え、人格を尊重する態度」の平均値は4.33、「福祉の仕事に対する興味・関心と福祉の仕事に対する良好な意識」の平均値は4.01であった。各尺度の平均値が４点台であることから、社会福祉施設での介護等体験実習を通して、学生は概ね良好な意識をもったといえる。

さて、本研究では、性（男性，女性）の違い、所属（養成課程，非養成課程）の違い、施設（児童福祉施設，障害者支援施設，老人保健福祉施設）の違いを視点として分析した結果、「職員の方との良好なかかわりと職員の方に対する感謝の気持ち」、「人の気持ちを考え、人格を尊重する態度」、「福祉の仕事に対する興味・関心と福祉の仕事に対する良好な意識」のいずれの尺度においても有意な差はみられなかった。このことは、上記の視点の違いによって各尺度の得点に明瞭な違いがみられなかったことを示している。とくに、施設の間に明瞭な違いがみられなかったことは、ある特定の施設で実習を行った学生がポジティブな意識をもったり、また、ネガティブな意識をもったりしていないことを意味しており、意義がある。

実習先が希望した施設であったのか、そうでなかったのかといった違いを視点として分析した結果、「職員の方との良好なかかわりと職員の方に対する感謝の気持ち」と「人の気持ちを考え、人格を尊重する態度」の２つの尺度においては、実習先が希望した施設であった学生とそうでなかった学生の間に有意な差はみられなかった。しかし、「福祉の仕事に対する興味・関心と福祉の仕事に対する良好な意識」の尺度においては実習先が希望した施設であった学生とそうでなかった学生の間に有意な差がみられ、実習先が希望した施設であった学生の得点が、実習先が希望した施設ではなかった学生の得点よりも高かった。このことは、実習先が希望した施設でなかった学生が、実習を通して、比較的、その分野の仕事に対して興味・関心を高めにくく、良好な意識をいだきにくかったことを示唆しており、今後の課題といえる。

おわりに（今後の課題）

本研究では、障害者支援施設へ参加した学生の回答数が９名と比較的、少ない状況で分析を行い、得られ

た結果を基に解釈した。今後、調査を継続し、調査対象者を増やしていく必要がある。また、本研究では、介護等体験実習が学生の意識に及ぼす影響の一端を明らかにすることができたが、この研究で得られた結果が例年、みられることであるのかどうかといったことは明らかになっていない。この点からも、継続して研究していく必要がある。

謝辞

ご指導・ご助言いただきました山口大学教育学部の松田信夫氏、岡村吉永氏、小杉考司氏、山口県社会福祉協議会の奈良真弓氏に感謝の意を表します。

引用・参考文献

新崎国広（2005）：学習主体者の学生から見た介護等体験，福祉教育・ボランティア学習研究年報，第10号，pp. 234-243.

伊藤直樹（2010）：教員養成における介護等体験の意味－2006～2008年度介護等体験アンケートの分析から－，明治大学教職課程年報，第32巻，pp. 41-51.

梅澤嘉一郎（2008）：介護等体験における自己達成感に関する研究－社会福祉施設での体験から－，川村学園女子大学研究紀要，第19巻　第１号，pp. 129-147.

浦島昭三・白石淳・藤井真希子（1999）：学生の介護等体験に関する調査研究－初等教育学科に在学する学生への意識調査をもとにして－，北海道女子大学短期大学部研究紀要，第37号，pp. 117-132.

佐藤嘉晃・藤田主一・和田美知子（2000）：「介護等体験」実習に関する教育心理学的研究－教職課程履修学生による実習後調査に基づいて－，城西大学女子短期大学部紀要，第17巻　第１号，pp. 37-54.

佐藤嘉晃・和田美知子・藤田主一（2001）：「介護等体験」実習に関する教育心理学的研究－（その２）教職課程履修学生による実習後調査に基づいて－，城西大学女子短期大学部紀要，第18巻　第１号，pp. 39-52.

佐藤嘉晃・和田美知子・藤田主一（2002）：「介護等体験」実習に関する教育心理学的研究－（その３）教職課程履修学生による調査を通して－，城西大学女子短期大学部紀要，第19巻　第１号，pp. 52-62.

田実潔（2008）：介護等体験による学生の意識変化について－教職志望学生が介護等体験から学ぶもの－，北星学園大学文学部　北星論集，第45巻　第２号，pp. 73-81.

田中敦士・片岡淳（2006）：介護等体験の実践に関する研究（第２報）－体験学生に対する質問紙調査から－，琉球大学教育学部紀要，第69集，pp. 9-19.

藤野信行（1999）：学生の介護等体験意識に関する研究，聖徳大学研究紀要　短期大学部，第32号，pp. 79-83.

山口大学教育学部教育実習部（2008）：平成20年度　教育実習の手引き，59pp.